火星

平成二十四年十月号

平成二十四年十月一日発行（毎月1回1日発行）通巻八七三号

七曜抄（八）

山尾玉藻

食細き仏はげますきりぎりす

夫の知らぬ花野に冷えてきたりけり

仏らの車座となる花野かな

呟きしは茸か夫か山の昼

PDF= 俳誌の salon

秋風や崖の中途の石切場

月の座の夫にたはむれ鬚ありし

我と我が声にうなづき障子貼

ぞんがいにすすむひとりの障子貼

とろろ汁父の啜りてより啜る

老人のどつと入りゆく紅葉山

PDF= 俳誌の salon

最期の句稿

山尾　玉藻

岡本高明の七七忌を修して落ち着きを少し取り戻しはしたが、胸中の空洞は一層大きく深くなったようである。これが本当の寂しさというものなのだろう。高明の遺影に文句を言い泣き顔を見せる。すると高明の穏やかな表情が心なしか翳ったような気がして、「ごめん、ごめん」と詫びながら手を合わせる。

高明の癌が発覚し存えても数年の命と医者に伝えられて以来、生来の我が儘者の高明が泣きごとひとつ言わず治療を受ける姿を見て、私は自分の感情を一切封印して看病と句会や吟行出席だけに専念しようと心に誓った。入院中毎日、高明は明日持ってきて欲しいものをメモ書きにしていた。愛用の枕二つ、置時計、歳時記五冊、天眼鏡は然もあらんと思ったが、四kgの広辞苑、古語辞典、漢和辞典、日本と世界の地図帳二冊（これが馬鹿デカい）、地球儀などと書かれていたのには驚いた。数日のうちにベッドの周りは愛用の品々で塞がり、その中で高明は常と変らぬ様子で静かに作句に勤しんだ。

七月十九日、高明が急死した病室で夢中で纏めた荷物の嵩は凄かった。何もかも纏めたつもりで退室する私を、「忘れ物ではないですか」と婦長が呼び止めた。なんとそれは高明の最期の句稿の下書きであり、私は大いに慌てた。

私はこんな風に間が抜けている。高明が死ぬ間際まで私の行く末を案じて呉れたのも無理はない。「人は在るがまま自然体が良い。余り頑張り過ぎるな」が高明の口癖であった。これからは頑張り過ぎずに頑張りたい、と心新たにしている。

PDF= 俳誌の salon

たとふれば徴(しるし)て癒(いゆ)れーわが五体

炎天をさとして五体はこびをり

炎天や素のわれすでに遠のきぬ

走馬灯ほどの半し方めぐるめぐる

移さるる仰の花磨ー風前まで

青梅の死を言ひ老とかなします

裏の田の梅雨の月夜を五位歩く

山百合に後生の風の通ひをり

草花吹くきれいな列(ケツ)のつづきをり

髭、仏のよく伸びること明易し

夏痩の昼の寝覚となりにけり

雨あとの夕月ふたたび金色(こんじき)に

麦秋の笑ひあやふくさびしかり

燈蛾軌跡のごとき歩みなり

炎天へ中途の笑ひかなしけれ

PDF= 俳誌の salon

太白星

杉浦典子

蘇鉄咲くと堺より来る刃物研ぎ

草取りの腰折りにけり梅雨菌

マニキュアのうらへまはりし子蟷螂

木下闇磁気あるものを身につけて

閻魔堂の扉ひらきぬ蓮は実に

バイク二人巡礼街道緑さす

がうがうと山鳴つてをり梅雨の滝

PDF= 俳誌の salon

大風の止みしベンチの蟇

四阿の革座布団や草いきれ

綴帯に運ばれて来し落し鱧

葭倉の錠前黒し水匂ふ

壁鏡拭へば曇る緑の夜

日雷てんと虫翅開きしまま

舟着場へ打水の筋にほふなり

浜口高子

PDF= 俳誌の salon

火星作品

山尾玉藻選

簗番の漱ぎて水を離れけり　神戸深澤　鱶

面(つら)いよよ尖つてをりし囮鮎

古里や舐りつくせし鮎の骨

鉾立や二の縄のとぶ神の空

鉾立つやそよげる松に陰もなく

降りて来し鴉ぬれぬる大祓　大和郡山城　孝子

星祭たれかれの手とふれ合うて

山蟻のてんでに走り祭くる

七夕や父がだまつて風呂みがく

夏安居や亀の子青き奥の院

赤棟蛇落ちたる草のそよぎをり　八幡坂口夫佐子

法帖を伏せて立ちたる跣足かな

谿間の電線たわむ旱星

PDF= 俳誌の salon

はじけ合ひ湖へ出る揚羽かな　宝塚松井倫子

燕去にわだちの泥の翡翠いろ

叢に露草一花戻り梅雨

日盛や歌劇なき日の楽屋口

石室のしづくしてゐる日の盛

足下より町騒上がりくる旱

蚊遣焚きあるカーニバル水飲み場　山本耀子

笹百合や音の一切なきところ

南風の巌に垂るる釣梯子

曇天の音に零れし凌霄花

青梅雨の飢へひた寄す波頭

鮎の腸すすれば炭の香のしたり

三伏や鴉の止まる水位計　八幡大山文子

日雷生簀の底のあらはなる

簗小屋の風に回りし換気扇

遠雷や板場にはかに水使ふ

棺舁くに一人遅るる旱かな

PDF= 俳誌の salon

選のあとに

山尾　玉藻

簗番の漱ぎて水を離れけり　深澤　鱶

鮎が生息するほどの川なら清流であり、簗番が口を漱ぐ行為もさして不自然ではない。しかし簗番のこの何気ない行為から鮎の川が簗番の生活と一体となっていることが窺え、作者もそこに興を覚えたのであろう。同時発表の〈面いよよ尖つてをりし囮鮎〉は作者の主観がやや働く写生には違いないが、読者も囮とされる鮎の緊張感や疲弊感を充分イメージすることが出来るだろう。

星祭たれかれの手とふれ合うて　城　孝子

七夕笹に短冊を結びつけたり、夜空を見上げて話し合ったり、星祭は子供や女性にとって夢のある行事である。「たれかれの手とふれ合うて」にはそんなほのかな嬉しさが漂っていて、女性らしい感性に成った一句である。〈七夕や父がだまつて風呂みがく〉、子供や女性の祭と言っても過言でない星祭の夜、父は家族から忘れられたやや淋しい存在なのか。「だまつて風呂みがく」が少し切ない。

燕去にわだちの泥の翡翠いろ　坂口夫佐子

そろそろ燕が南へ帰る頃だと意識しながらもそれがいつなのかは定かでない。ある日ふと空の冷やかさや淋しさに気付き、燕が帰ってしまったことを実感する。しかし、作者はその季節の微妙な変異を空にではなく地面の轍の泥の色に感じた。そこに独自の視点がある。「泥の翡翠いろ」の発見が揺るがぬ据わりようを示している。〈赤棟蛇落ちたる草のそよぎをり〉、いつまでも止まない草のそよぎは、赤棟蛇が落ちてきた時の作者の驚愕の余韻でもあるようだ。

草叢に露草一花戻り梅雨　松井　倫子

一旦梅雨が明けて猛々しく伸び始めた草叢の中、一輪咲く露草はいかにも可憐。しかも雨に濡れて瑞々しかったことだろう。戻り梅雨らしい景。〈日盛や歌劇なき日の楽屋口〉、宝塚歌劇のスターを楽屋口で待ち受ける女性たちは非常に行儀がよく、楽屋口は整然とした華やかさに満ち、謂わば特別の場所である。しかし休演日の今日は閑散として、炎暑の極み漂わせる単なる出入口に過ぎないのだ。

笹百合や音の一切なきところ　山本　耀子

笹百合は山中で見かける淡紅いろの大ぶりな百合。山歩きをしていた作者も笹百合を見つけ思わず足を止めたのだろう。「音の一切なきところ」とは山中の静けさを言ったものではなく、辺りを制するように咲く笹百合の際立った美しさを感覚的に喩えた措辞である。

棺舁くに一人遅るる旱かな　大山　文子

出棺の刻となると祭場の空気が一層引き締まる。棺を舁ぐ人たちが進み出たが、中の一人が遠慮がちに少し遅れて棺に寄ったのだろう。そんなほんの束の間、厳粛な空気とは異なった空気が漂ったようで、その小さなずれ感がふと現実の「旱」の思いに繋がった。（以下略）

PDF= 俳誌の salon

恒星圏

同人Ⅰ

加古みちよ

基金して綿菓子貰ふ夜店の灯
夕闇の明るきところ半夏生
端居して鉢植に水やつてをり
年齢のつい口に出て油照り
星流る（高明先生）報せを信じ難くをり

長田曄子

端居して足裏に触るる犬の舌
ありし日のままに麻服吊りありし
溝はしる蛇に犬とまりけり
額と額ありがたうよと星月夜
昼寝覚やんはり笑まふ遺影前

河﨑尚子

止まるたび顔扇がるる祭馬
祭馬のあとに続けり糞の籠
小若衆の腰浮かせ漕ぐ祭舟
岸蹴りし梅鉢紋の祭足袋
講舟よりビールジョッキの声あがる

垣岡暎子

いつ死ぬのと幼に問はるところてん
うき苗や片足畦にふんばつて
とりこぼしの実梅の落ちし音なりし
はやばやと降りる遮断機夏つばめ
手をつけて水の強かり海開き

小林成子

夏至の夜の吹き抜け上がる嬰のこゑ
キャンパスや渡り廊下の大蛇めく
明日帰る青鬼灯のいろづきし
宵宮の京を過ぎたるのぞみ号
夏暁の投函のおと軽きかな

PDF= 俳誌の salon

獅子座

山尾玉藻推薦

炎天の別れなりけり肯へず
白百合の香ごめに柩鎖されたる
閃閃と柩車を打てる驟雨かな
喪ごころにあまりに青き夏野かな

川端俊雄

戸口までつづく坂道梅を干す
水馬のきて笹舟のおぼつかな
道をしへ橋のたもとで別れけり
交番の灯に蚊柱の傾ぎたる

田中文治

半日は一人なりけり釣忍
夏草の匂ひの電話ボックスへ
でで虫の割れたる殻に月上る
一匹の蟻の行方や楸邨忌

涼野海音

朝ぐもり猫の寝そべる子安寺
リーゼント頭がのぞく蟬の穴
曇天のいよいよ低し蓮の花
水中花すべて昔の話なり

藤田素子

羅の僧の目深にヘルメット
ほととぎす佛壇の灯のぼんやりと
街道の下よりの風夕立あと
端居して家内の灯の淋しさう

笠置早苗

午後よりは虫干畳みつつひとり
端居して三代の貌並びをり
蓮の実をつまんでもどす指かな
走り根に走り根絡む残暑かな

根本ひろ子

盲導犬端居の人に添ひゐたり
串カツ屋の連なる浜の灼けゐたり
大文字山を遠くにお風入れ
虫干の縁に鶏あがりたる

西畑敦子

PDF= 俳誌の salon